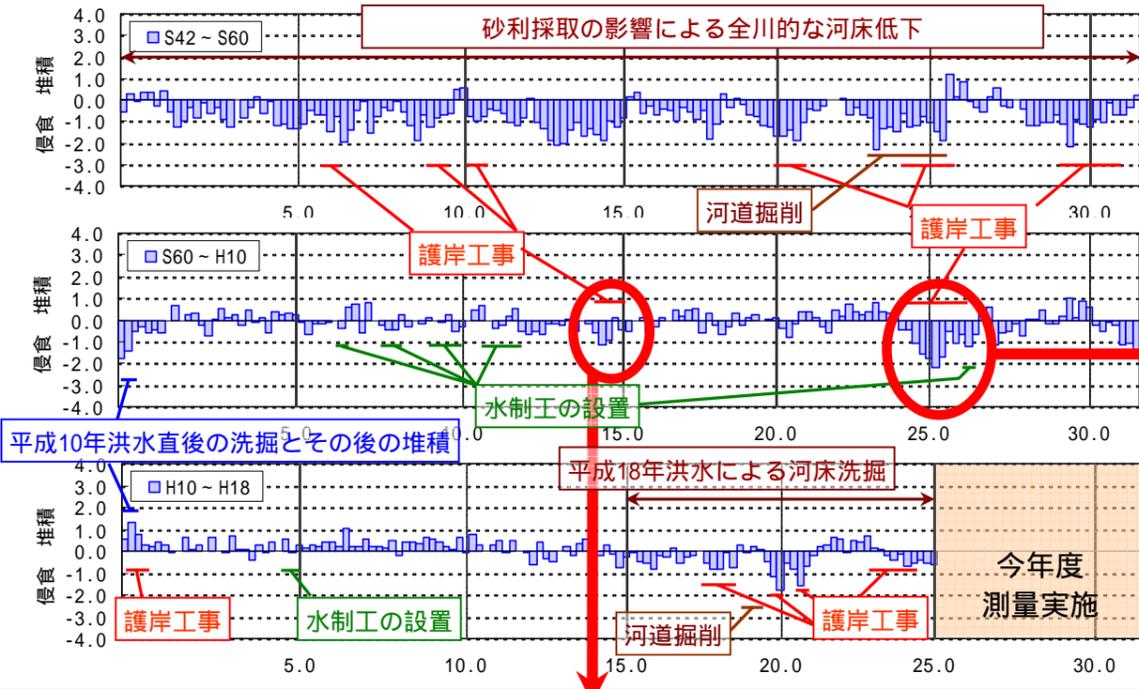


護岸工事に関連する河床変動として、低水護岸等で流路が固定化し流れが集中して河床が低下したものと、護岸や水制等の施工に伴う自然河岸の掘削分を河床変動として集計しているものが混在している。特に留意が必要なのは前者であり、両者を分けて整理して頂きたい。

KP14付近については、流路の固定化に伴う流水の集中が河床低下の要因と考えられ、KP25付近については、護岸の施工に伴う直接的な自然河岸の掘削とその後の洗掘が含まれている。特に河床の低下について引き続きモニタリングを継続し、必要に応じて適切な対応を行う。

河床変動の経年変化

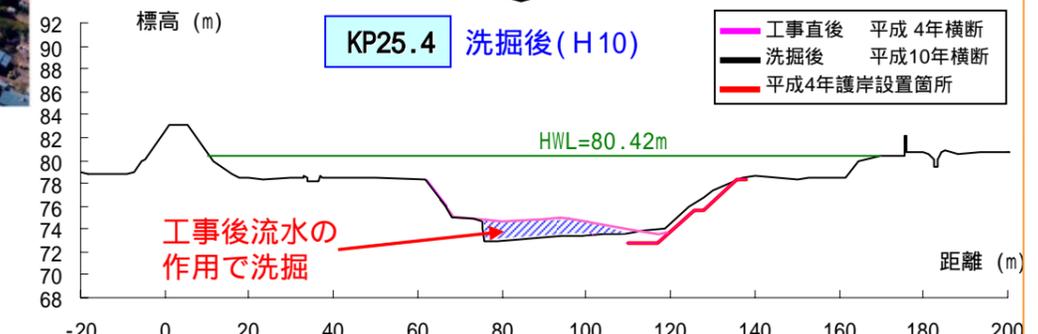
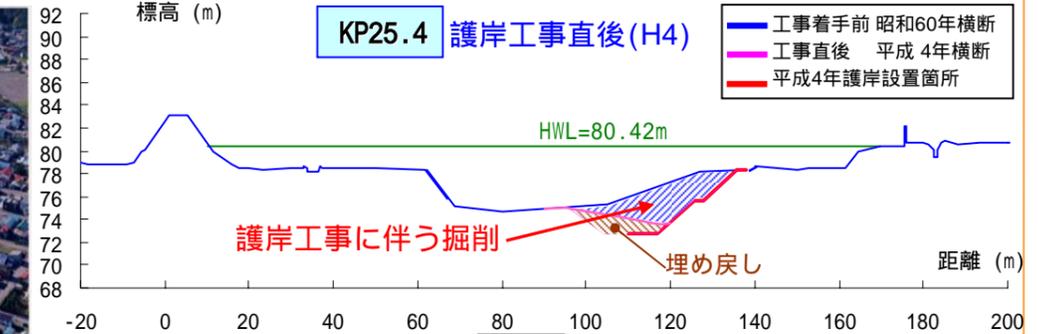


護岸等の施工に伴う自然河岸の掘削等による河床変動の事例 (KP25付近)

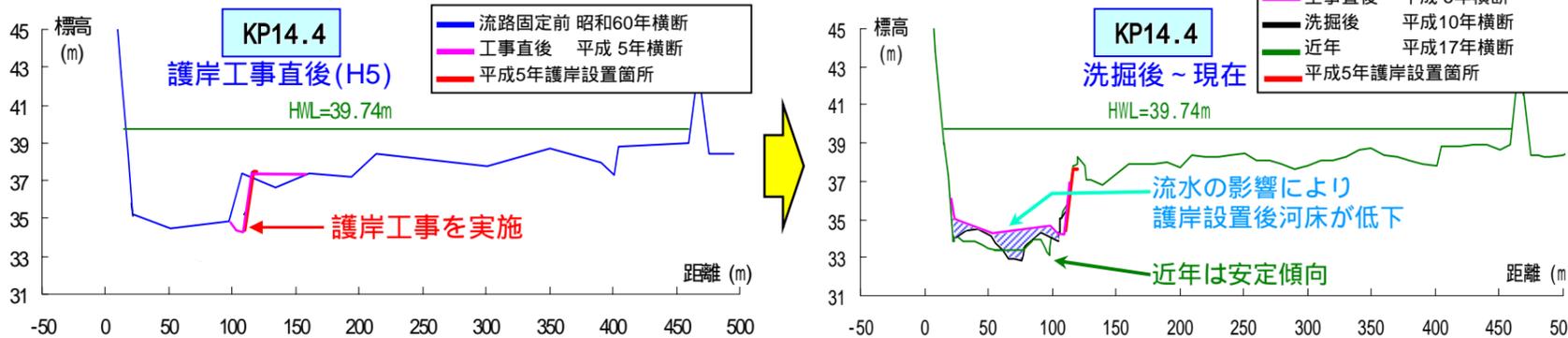
平成元～4年にかけて、右岸護岸工事の施工と併せて河床を2m程度掘り下げている。その後、河床全体が護岸河床高まで洗掘されている。



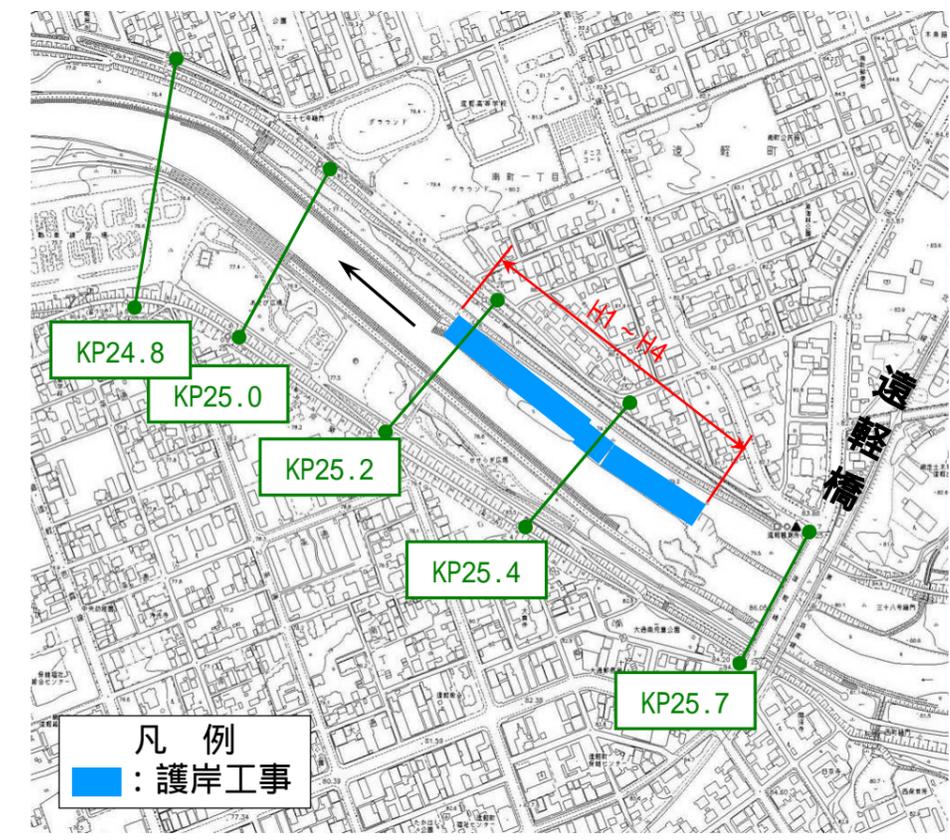
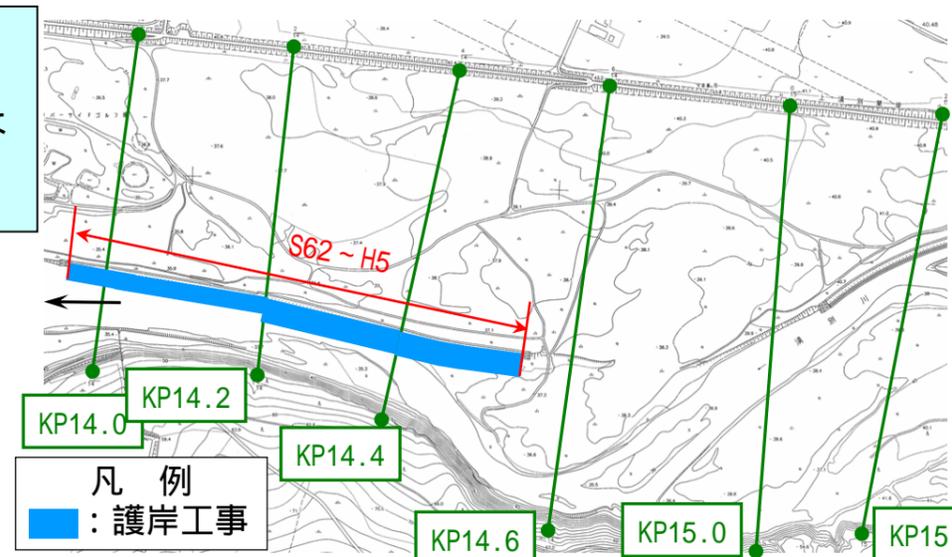
H1～4にかけて護岸工事を実施



流路の固定化による河床変動の事例 (KP14付近)



昭和62年～平成5年にかけて、流路を固定化するため、護岸工事を実施している。低水路幅が狭くなり流水が集中したことにより、河床が低下している。近年は安定傾向にある。

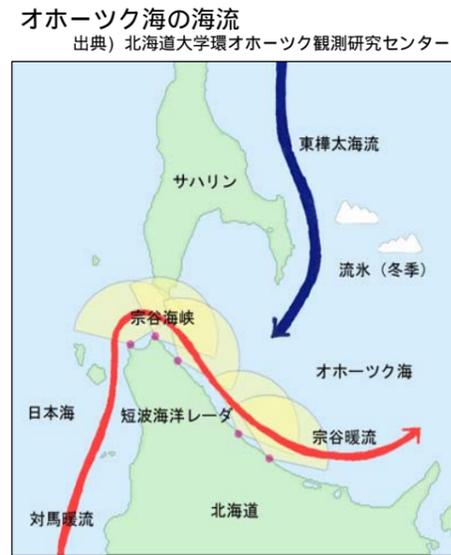
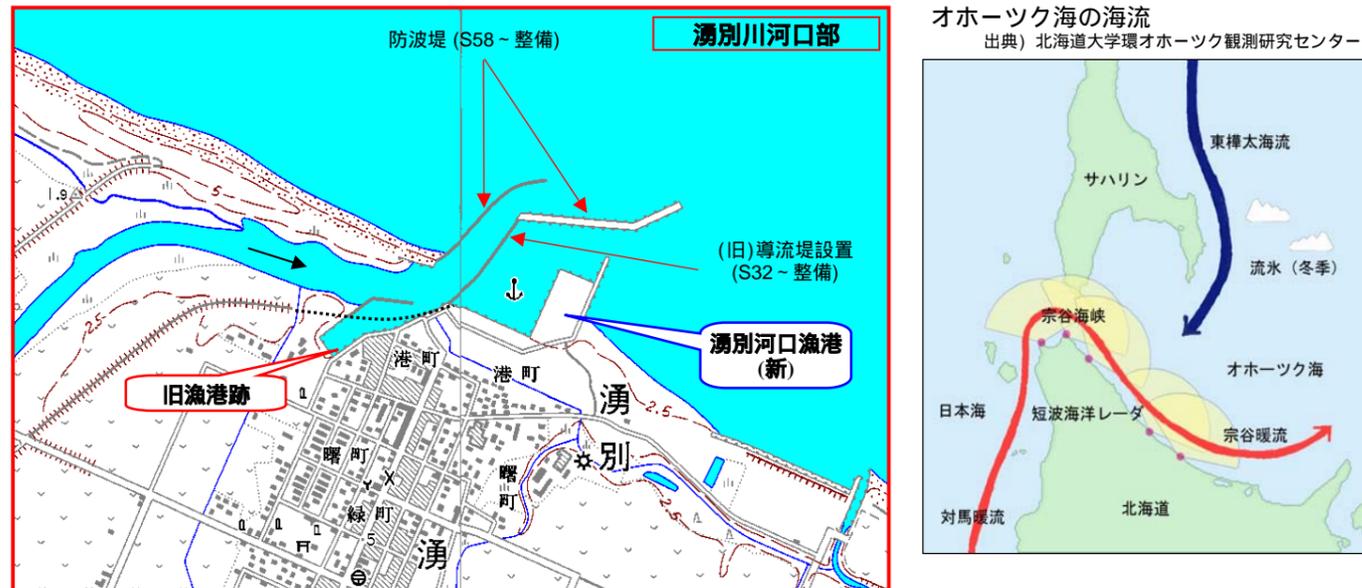


河口部の砂州の発達経緯について確認が必要。また、洪水の流下時において支障とならないのか確認が必要

出水時には河口部の河床は洗掘され、河床低下しながら洪水が流下したものと推定される
引き続き横断測量による河床の変動状況や洪水痕跡水位調査による水面形の把握等、各種データの把握に努め、適切な管理にフィードバックしていく

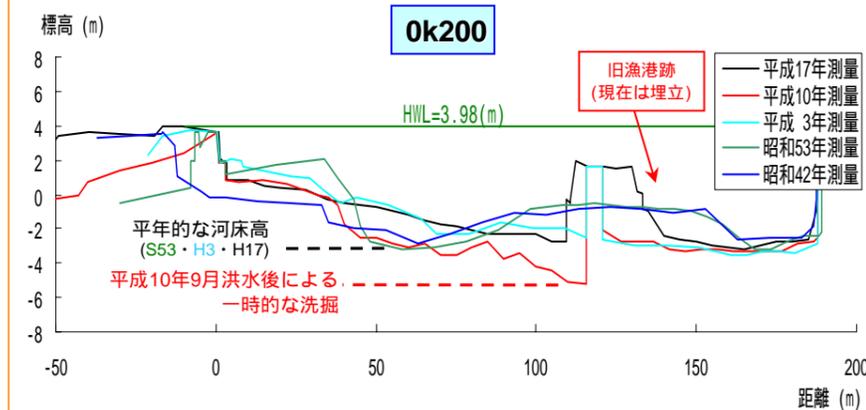
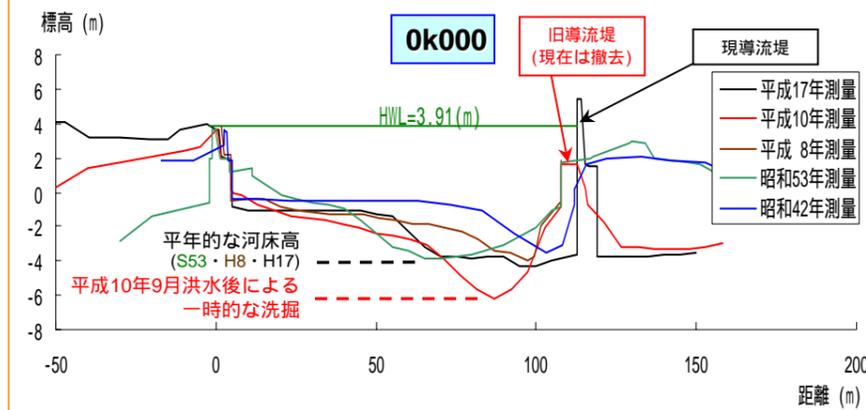
導流堤の向きについて

オホーツク海の海流は、宗谷海流が海岸線に北西から南東方向に沿った流れとなっている
そのため、河口部は左岸に砂州が出来やすく、右に湾曲し海に流れる傾向がある



洪水時の河口部の河床洗掘の推定

平成10年9月洪水時には、河床は一時的に洗掘され、その後、平成17年の測量時には平年の河床高まで戻っている



出水時の河口部の流下状況

洪水時の状況の把握に向けた今後の取組(案)

洪水前後での河口部の横断形状を把握するとともに、痕跡水位等の調査等により水面形の把握を行い洪水時の河床形態等の推定に努める
各種水理データについてモニタリングを継続し、必要に応じて、河道計画や適切な管理にフィードバックしていく

